

企業組織
改造の要
求

この大なるが爲に、這間に種々の問題は惹起されざるを得ない。所謂「社會問題」なるものが、現今益々紛糾しつゝあるは、蓋し其の根本の理由を、此所に置く次第である。茲に於てか、今や經濟の現制度を改造し、企業組織を革め、私人や私會社が營利の爲めに、即ち餘剩利潤を得んが爲めに、社會一般の利益を犠牲にして、生産の業務を營むの組織を廢して、生産は専ら直接に其任に當る精神的並びに肉體的労働者の團體の手によつて之を管理するか、然らざれば、社會全般の利益の爲めに、國家の手によつて之を管理し、以て成可く企業上に餘剩利得の生ずるを防ぐと同時に、已むを得ずしてその發生するものは、之を直接生産上の勞苦に當る労働者に於て所得するか、然らざれば國家の手に收めて社會一般の利用に向けんとするの主張が、漸次其の勢力を増しつゝあるを見る次第である。廣き意味に於ける「社會主義」之である。尤も同じく社會主義と呼ぶるものの中にも、其の理想とする所が異り、其の主義としての立場が異り、新經濟組織に對する計畫の異なるに依て、種々に區別され得可きものがあるけれども、其の一致する所は、現今の企業組織を革め、企業利潤が、企業家なる者の所得に歸するを廢止せんとするに存し、之を中心として、全般に涉れる經濟組織の改造を行はんとするものである。

社會主義
の主張

惟ふに現時の經濟組織が、經濟進化の一階段として現存するものに外ならざるからには、それが一般文化の進歩と共に、更に完全なる新組織に向つて變り行かんとするは、洵に當然のことであつて、其勢の避く可らざると共に、又そは實に、人類生活の進歩の爲めに歓迎す可きものたるを否むことが出来ぬ。其勢を促進するは、吾々の任務である。不完全のものは、漸次に之を完全のものと爲すこと、即ち之を進歩と謂ふのであ

經濟學の
時勢に對
する適應

る。而して現今に於て經濟學上の理論として認めらるゝ所のものは、經濟の現組織に就いて、之を支配する理法を説くに過ぎぬのだから、經濟の組織が變遷するに連れて、其の理法も亦變更されざる可らざることには、忘れてならぬ所である。現時の私人經濟を基礎とする國民經濟が全く革つて、社會主義組織の經濟の行はるゝ時が到來することありとせば、其の時には又現時の經濟論とは甚だ面目を異にせる新理論が、行はるるに至るべきである。之れ經濟學が、自然科學たらずして、社會科學たる性質上、當然のことに屬する。從て經濟學を學ぶ者は、常に社會に於ける經濟生活の實際狀態の變化に注意し、之に應じて理論を立つる工夫を爲すを怠つてはならぬ。

第四編 合理化論

第一章 合理化の意義

經濟體系
の合理化
程度

一 經濟の合理性 何時の時代の經濟でもそれが一の纏つた社會經濟として成立つからには、一の體系として整つた形を備へ調子の取れた働を爲すものでなければならぬ。けれども經濟は時代の進歩と共に益々發達して止むことを知らないものであるから、時代々々に於ける經濟體系は、それが合理的に組織づけられたる程度について見れば、多少づゝ程度の異つたものたらざるを得ない。そして大體に於ては、時代が進み經濟が發達するに連れて、其の合理化の程度は段々高くなるものと見て差支ない。

けれども經濟の發達は當然に高き合理化状態を齎すものとも限らないのであつて、たゞ合理化せられたる状態だけについて見れば、比較的幼稚な經濟に於て却つて比較的高き合理化状態を見ることがある。例へば中世時代の手工業組合組織 (Guild system; Zunftwesen) に於ける生産及販賣組織は、現時の自由企業に於ける生産及販賣組織に比し、遙かに合理的に組立てられたるものであつたと見て差支ないであらう。少くと

企業組織
の合理化
程度

も其組織の整つて居た點に於ては、遙かに現代の状態を凌いで居たと謂へるであらう。
たゞ合理化といふ點だけから謂へば、現代の自由企業制の下に於ける生産と販賣との實狀は、成程その部分分について見れば、頗る高き程度に合理化せられたる所もあるが、之を全般的に見て一の纏つた社會經濟體系として觀察すれば、其間大いに合理化の缺けたる所あるを否み難い。即ち現時の經濟は、生産の技術的方面について見れば、廣く機械を用ふる分業組織を有するだけあつて、よほど合理化せられたる状態を示す方面が少くない。けれども其の生産を行ひ引いては製品を販賣するについての業務組織に關して之を見、又その業務經營の狀況について觀れば、よほど合理性の乏しき所あり、尙ほ大いに之を合理化すべき餘地多きを見通し難い。

自由主義
と合理性

何しろ現時の經濟は、自由主義を根本の基調とするものである。そして其所謂自由主義經濟なるものは、各個人のイニシアチヴを尊重し、生産も消費も自由の經營に委かすことを以て本旨と爲し、國家其他の社會團體はたとへ權力團體たるものであつても、各人の自由行動に對して成るべく干渉しないやうにし、成るべく消極的態度を取るといふ立場に在る。されば自由主義の下に於ける經濟は、其の生産や交易や消費やの行はれる部分々々についてみれば、之を行ふ主體の選ぶ所に從て或程度までは其の經濟が合理的に組立てられ合理的に實行せられる所はある。然し之を全體としてみれば合理化の行はれるも行はれざるも、謂はば自然の成行にまかされる次第であつて、あまり全體として意圖的に合理化の行はれることはない。又其部分々々について見ても、何分にも經濟の業務が新規なものから更らに新規なものへと急速に移り變

り、所謂日新月歩の有様であり、其狀特に生産方面に於て著しいものだから、其業務を合理化することは、兎角思ふやうには行はれず、かなり甚しい混雜と從て生ずる無駄とを免れ難い状態に在る。經濟上の自由主義は企業の發達を促し經濟活動を敏活ならしめる點に於ては、洵に大なる長所を有つて居るが、混雜と浪費との避け難い點は其短所といはなければならぬ。

合理化の
必要

然かも近時の實狀に於ては、企業の行はれること愈々活潑となり、生産と交易との隆盛其極に達せんとするやうな勢を示して來たものだから、自由企業と自由競争とに伴ふ混雜と浪費とも益々多きを加ふるに至り、何とかして今少しく状態を整理して以て生産も交易も引いては消費の方面も更により多くの有効性を發揮するやうに努むることの必要が、痛切に感ぜらるゝに至つた。そして其必要に應ずる道としては、更に大いに經濟を各方面と各部門とに涉つて合理化することが、最も適當な道と考へられるに至つた。所謂合理化運動は斯くの如くにして起きて來たのであつて、生産と交易との兩方面を主として、引いては消費の方面にまで涉つて、經濟の有効性を増進せんが爲めに、廣く經濟活動を十分合理的なる基礎の上に築き上げ、依て以て更に速かなる經濟の發達を圖り、又經濟界のよりよく整頓せる状態を造り出さんとする努力に外ならぬ。

されば合理化の意義は要するに之れ經濟をして合目的ならしめんとすることに存する。別の言葉を以て之を言へば、經濟をして飽迄經濟主義に合致せしむること、即ち最少の勞費を以て最大の効果を擧ぐるを得るやう、經濟上のあらゆる組織を整へ、又經濟活動を統轄することを意味するものである。そして彼の經濟主義なるものは、之を現時の營利企業として行はれる生産に就いていへば、最少の生産費を以て最大の利得を

産業の合
理化

擧げることの意味するは外ならざる次第なれば、現今普通に唱へられる經濟の合理化は、主として産業の合理化の問題として表はれ、其目的は企業利得を出來得る限り大にすることに存し、然かも之を爲すが爲に専ら力を生産費の節減に注ぎ、依て以て生産者も利得を大にすると同時に、消費者に對しては、之に依て商品

の價格を低廉にするを得て、其利便ともなるを得んことを期するものである。

二 合理化と科學的經營 合理化の意義は上に述ぶる所の如くなるが故に、之を實現せん爲めには、産業々務の經營に於て良く其組織と道筋とを整へることが重要なこと、ならざるを得ない。從て彼の所謂科學的經營の問題とは、頗る密接な關係を有する。

目的と手
段との關
係

仍て試に兩者の關係について見るに、經濟若くは産業の合理化といふことは一般的な命題であり、科學的經營なるものは主として經營を行ふに就いて採るべき手段方法に關するものであるから、科學的經營は合理化の目的の爲に用ゐらるべき一方法と見て大過ないであらう。合理化は必ずしも經營に關する科學的研究と其適用とに依て行はれるに限らない。經驗率に従つても亦よく行はれ得る。科學的に十分精確ならざる智識も、經驗上に於ては稍々確定せる規範となり得る次第であつて、經濟の合理化は、この兩者を共に用ゐることに依て都合よく行はれるものであらねばならぬ。

苟も科學的といふ限りは、それは必ずや抽象と普遍化と客觀性とを必要とする。從て所謂科學的經營なるものは、この意味に於ける科學的規範に服従し之を遵奉して行はれるものである。されば苟も科學的經營といふからには、それは常に規範を必要とするものと見て差支ない。そして産業の合理化は規範を立て之に從て經營を行ふ道に沿ふても、よく實現し得べきもので、其道は合理化の道筋としてはやはり本道を爲すものなることも論なき所である。然らば即ち科學的經營なるものは、合理化の行はれる主道と見て差支ない。

合理化の
本道

注意すべきことは、從來亞米利加などに於て唱道せられる科學的經營なるものは、科學的とは銘打たるもの、其意義が十分正確に科學的であり得ないで、たゞ僅かに不完全なる部分的な學問的研究を伴ふに過ぎざる嫌あることこれである。そしてそれが不完全であればあるほど、合理化の大命題に對しては、其一段として比較的輕き關係だけしか有し得ざるは言ふ迄もない。

組織の合
理化

併し眞實の意味に於ける科學的經營は、産業を合理化せしむる道としては、甚だ有效のものなるを否み難い。そして其働は主として組織の働に待たなければならぬものであつて、其組織が尙迄合理的に織り上げらるれば、それに從つて經營上に於ける合理化の實はあがり効果は發揮さるゝ。そして其の合理的なる組織化は、大規模なる現代的生産事業に於て最も容易に實現するを得、又益々多く其効果を發揚し得る。

元來人が生産を行はん爲めに其業務を行ふに當つては、一人々々の人が之に精神を投入して魂を入れて之を行ふ種類の仕事と、多人數が組織を立て主として其組織の働に依て業務の行はれる種類の仕事とがある。即ち例へば自作農業や手工業や或種の交通業やの如きは前者の例に屬し、此種の業務に在つては、其魂の入ると入らぬと、又其魂の入方とに依つて、業務の成績の上には大いなる相違を生ずることになる。

魂の入つ
た仕事と
然らざる
もの

然るに主として組織の働に依つて行はれる仕事は、魂の入つた仕事とはなり難いものである。魂の入つた仕事とならん爲には其規模が餘りに大きく、とても一人々々の精神の注入に依つて其働で以て仕事を活かして

行くことは出来難い。此種の業務に於ては組織は人的要素と物的要素との結合に依て造り成され、其結合構成が如何にも整つたものとして出現し、全體は一の大なるメカニズムとなつて、其働に依つて生産は行はれる。そして固より其メカニズムに於ても一種の精神に似たやうな微妙な働が表はれるが、それは殆んど有機的にまで造り爲される組織の働に外ならない。之に携はる人々の個人としての人間的な魂の注入に依て仕事が生きて働くのとは其意味を異にする。斯くの如きは譬へていへば一の時計仕掛を見たやうなものであつて、さながら精神の有るが如くに微妙な働をするのだが、その働はやはり精巧に造られたる機械の働に外ならない。

組織上の
人的結合

何れにしても組織的な大企業に在つては、人と物とは相集り相結合して共同の働を爲すけれども、其働は、其結合の宜しきを得たるに依て表はれるものであるから、人々一個々々の人格的な要素は多く其働を認められない。従て其組織内に於ける人と人との關係に於ても人倫的な關係は比較的稀薄ならざるを得ない。即ち人々は主として事務的に仕事の上に於て繋がるに過ぎない。従てかゝる組織體に在つては、之に携はる人は何となく器械化する嫌あるを免れ難く、一人格者として見られるよりも一個の働手 Working hand として取扱はるゝを免れ難い。そして此事は斯かる組織化する企業の有する一の大なる缺陷として非難せられる次第だが、それは又別問題として、とにかく組織といふことに重きが置かれ、之を十分科學的な基礎の上に築き上げることに、力の注がれるを見るのである。

三 組織の體系化

上に述ぶる所に依て現時の大規模なる生産企業には如何に組織といふことが大事で

組織の重
要

三様の體
系

あるかゝわかる。特に之を合理化するに就いて如何に組織といふ點の重要なかゝわかる。そしてこの組織といふことに就いて今少しく委細に觀察するに、合理化の爲に行はれる組織は所詮十分に整つたものでなければならぬ。即ちそれが立派な體系に造り上げられたものでなければならぬ、所が組織を體系化するには自ら三つの道があり、三様の體系構成が考へられる。一は管理體系であり、二は主計體系であり、三は器具及機械體系である。

管理上の
部局

(一) 管理體系 Verwaltungssystem は業務を經營管理するに要する組織を造り、之を體系化することを意味するものであつて、分化と規格化(標準化)と指揮とに依て行はれる。就中分化は又二方面に就いて爲されねばならぬが、一は管理の爲にする部局を定め分課を造ることであつて、大體は**商的部局**と**技術的部局**と**經營的部局**とに分ち考へられる。そして其各の掌る所は、讀んで其名の示すが如く、生産品の販賣を主とし其他原料品等の買入などに關する**商的方面**に就いての事務と、生産の實行的技術に關する**事務**と、業務一般に涉つて之を指導し管理する經營に關する**事務**とを分掌するに在る。他の一方面は労働に關する區分を爲すことで、その區分は**水平線的區分**と**垂直線的區分**とに依て爲される。前者は労働者を熟練の有無若くは程度に依つて熟練労働者と不熟練労働者とに分ち取扱ふことを意味し、後者は職的分類として労働者を其分掌する所に從て區分することを意味する。

規格化

次に規格化について見れば、それは先づ労働に關する標準動作を研究することゝ、其研究の結果に從つて標準動作を制定することゝ、斯くて定まれる規格を實現することゝに依て行はれる。即ちこの規格化は標準を

定めて之に據らしむることを意味し、然かも主として實際上の作業に關して之を標準化することである。

この作業の標準化は科學的經營に於ては甚だ重んぜらるゝ所である。尙ほ作業以外に之を押廣めて考ふれば、一般的に事業そのものに關してもその標準化といふことが大切な事項であつて、現時の合理化運動に於ては、特にこの一般的標準化に留意せられ、合理化はこの一般的標準化の行はれることに依てよく實現し得るものと信ぜられて居る。されば一般的標準化については後に少しく詳かに之を説明したいと思ふ。

次に指揮といふことに關しては、經營を指導し之を合理化の道に沿ふて進行せしめん爲には、或計畫的意圖に従て指揮の行はれることが、必要缺ぐべからざる所である。然かもその指揮たるや、業務を統一し一の整つた歩調に於て之を合理的な道筋に沿うて導き行かんためには、必ずや中央の地位から一つの意思の發露として、其の指揮が行はねばならぬ。即ちそれは中央集權的な指揮として表はれて來なければならぬ。

此點は現時の生産企業が常に獨裁政治的指導の下に行はれるものとして、其特色が示され、又これに對する非難攻撃も行はれるのだが、要するに事業を一の纏つたものとして堅固に造り上げ、常に整つた歩調を以て其進行を爲さしめんためには、中央集權的な指揮は必要不可避のものたらざるを得ない。又それが獨裁的なるも免れ難い。たゞそが極めて少數なる者の専制君主的指揮として行はれるか、業務に携はれる者一般を代表する人々の合議機關に依る共同的指揮として行はれるかに至つては、豫め定まる所はない。従て兩者何れも行はれ得るが、傾向としては後者が漸次優勢を得んとする風あるを認めることが出来る。殊に合理化の爲にする指揮に於ては其傾向の助成せらるゝを要するは、明かな所である。此點に關しては尙ほ後に合理化

標準化と
指揮

と勞働利益との關係について論ずる際にも、述べて見たいと思つて居る。

(一) 主計體系 *Rechnungssystem* は業務の状態を數字の上に示して其實狀を明かにし、依て以て經營に於ける方針を定め其運營の道を講ずるに誤なからしめんとする爲に組立てられる體系である。そして其の體系は數字の上に出來上るものであるから、統計的調査と記帳とに力が注がれ、其基礎の上に築かれるものでなくてはならぬ。

數字的
基礎を
造る
こと

主計體系は右の事情からして直ちに考へらるゝやうに、二つの働を伴ふを要する。一は數字的實在の體系的決定であつて、他は即ち簿記である。前者は云ふ迄もなく業務の各般に涉つて統計的調査を遂ぐることに依て爲される。尤も業務の諸關係中には之を數字に示すことの不可能なものもあるから、それ等は如何ともし難いものとして之を措き、苟も數字に上ほすことの出來る關係は悉くこれを精密に調査して、業務全體に涉る構成として綜合し分類し、以て體系的に組成する次第である。此の數字的體系を造り上げるに就いて特に重要なことは、各種の出費項目に關する正確なる數字を得ることである。詳言すれば勞働に關する出費 *Arbeitskosten* と物的出費即ち原料其他に關する出費 *Materialkosten* とに就いて正確なる數字を得ることである。これが正確に得られるならば、生産品に關する原價計算を爲すことも正確なるを得、其他一般的に業務經營の數字的基礎に關する正確なる認識をつかむことが出来る。

出費項目に關する數字的認識と相並んで重要なことは、謂ふ迄もなく收益項目に關する數字的認識であるが、後者は前者が行はれて甫めて可能なるを得る。正確な出費に關する數字的認識が得られない限りは、收

益上の正確なる認識に到達し難きは當然のことであるから、兩者は並び行はれるに依て共に正確なるを得る次第である。そして兩者が共に正確なるを得ば、直ちに業務全體に關する正確なる判断を爲すことが出來、合理化はこれを根據として行はれることになる。

簿記の必要

次に簿記の必要なることは、言を俟たざる所で、從來とても此の方面に關する研究は學理的にも實際的にも、かなり盛に行はれて居る。従てこれについては今更多く言ふべきことは無いが、たゞ從來の實狀に於てはたゞ簿記たるに止まり、未だ一の數字的體系として組立てられる迄には至らなかつた。然し合理化の爲めには之を上ほして一の體系的のものたらしむるを要し、上に述ぶる數字的認識を得るためにも簿記の飽迄精密に又飽迄正確なるを要する。即ち簿記が基礎となつて、其上に統計的な調査が爲し遂げられ、兩者の共同的な働に依つて數字的體系は組成さるゝを得るものと謂ふべきである。

體系の統一
けた現狀

(三) 器具及機械體系 現時の生産特に工業生産が機械を使用すること益々多きを致し、其の資本的設備の大部分は器具及機械の爲にせらるゝものなることは、何人の目にも明かな所である。然し現今の實況に於ては、器具や機械はその用ゐらるゝこと愈々多きに拘らず、其等多くの器具及機械相互間の關係を整へ之を體系化することに就いては、まだ大いに遺憾とすべきものが尠くない。これは現時の實狀がまだ不完全を免れない點左であつて、合理化を實現せんが爲には、此の方面に關しても十分整つた體系の造り上げらるゝことを必要とする。

器具及機械に關する體系を造り上げるといふことは、之を具體的にいへば、體系的なる自動設備をすること

と、其設備を規格化し標準化することゝを意味する。そして其の標準化は、獨り器具及機械體系に於てのみならず、苟も標準化が問題となる場合には一般的にさうであるが、とにかく其行はれ得べき道筋が大體きまつて居るのである。即ち其標準化は一つには國家及公共團體に依る單位標準の指定を以て行はれ、二つには個々企業に於ける規格制定に依て行はれ、三つには又多數企業の共同作用に依る規格制定を以て行はれる。そして此等は固より別々にも行はれ得るが、一三者が併せ行はれる場合には更に容易に標準化は實現すべき筈である。

現今合理化が問題とせられる場合には、常に此の標準化といふことが考へられるのだが、それはつまり之に依て從來の企業が其設備に於ても其製品に於ても、實に思ひ々々であつて、其間餘りに多くの種類と變化との存する爲めに、計り知るべからざる無駄と浪費の生ずるを避け難いからである。つまり標準化に依て設備と作業とを簡單にし、一面には無駄を省いて他面には能率を上げんとするものに外ならぬ。そしてそれが器具及機械體系を組成する上に必要なことは製品や作業振について必要ならぬと相譲らない次第である。

第二章 合理化と標準化

一 生産の標準化 上に説く所に依て是を觀れば、合理化を實現せんためには標準化を行ふことが必要で、兩者の間には甚だ密接なる關係の存するを見通し難い。仍て今少しく詳かに、その標準化といふことを主題にして觀察を試みて見たいと思ふ。そして之を試るについては少しく觀點を廣くして、一般的に生産の標準化といふ命題について之を行ふことにする。

抑も生産の標準化若くは規格化といふことは、大體に於ては、其設備や作業や製品や其他あらゆる方面に涉つて成るべく之を簡單にすることを意味し、從て或場合には之を廉價にすることを意味する。そして現今その簡單化といふことが特に必要と考へらるゝに至りしは、流行といふ現象が餘りに多くの浪費を強い、流品行工業の馬鹿々々しき浪費が産業界一般と引いては經濟界一般の調子を紊し、徒勞を大ならしむるのみならず、終には經濟といふ人生方面をして眞卒なる性質を失はしめ、甚だ浮誇輕薄のものたらしむる勢益々著大ならんとするものがあるが爲めに外ならぬ。この弊害に對しては、生産者は或は同業組合を作り、或は工業會議所を組織し、或は又カーテルの如きを組成して、其等の者の力に依り生産を統制して、徒勞と浪費とを防ぐに盡す所あらんとして居り、其必要は益々痛感せられんとして居る。合理化はやはり此の弊害除去の爲

簡單化と
廉價化と

めにも必要とせられるのであつて、經營それ自身を立て直すことに依て内部から生産事業の簡易化を實現せんと努め、其實現の爲めに標準化を行はんとするのである。

設備と作
業の標準
化

二 標準化の實現 生産の標準化は先づ生産設備の標準化に於て行はれるのであつて、それは前に器具及機械體系に就いて説くに當つても之を述べた通りである。設備と相伴つて標準化せられなければならぬのは作業の標準化であるが、これは主として工業心理學や其他勞働科學の研究に依り、其研究の成果を實地に適用することに依て實現せしめらるべきものである。即ちこれに依て標準的作業振を制定し、實際の作業は總べて其標準に從て行はしめることにするを要する。そしてそれは必ずや同時に作業道程の短縮となつて表はれねばならぬもので、道程が短縮せらるれば作業の能率も上がつて来る。

製品種類
の減少

三 製品の標準化 次に必要なるは製品の標準化である。これ亦必ずや生産の設備及び生産作業の標準化と相待つて共に行はれるものでなければならぬ。そして製品の標準化といふことは、其の具體的な表現としては、製品の種類の減少といふことゝ、部分品の標準化といふことに於て表はるゝ。製品の種類を少くするといふことは、之を生産者の側からいへば、生産を簡單にするが爲には最も有效なる道である。現今の實狀に於ては餘りに多くの種類の物が生産せられねばならぬ所から、生産の設備も複雑になり勞働の方面に於ても多種多様な技術上の要求に應ずるだけの備をせなければならなくなる。此間から夥しき徒勞と浪費との生ぜざるを得ざるは上にも一言した通りである。併しこの生産品の種類の減少といふことは、たゞ獨り生産者側に於ける意思のみに依て行はれ難く、必ずや同時に製品の消費者側に於ける需要の單純化といふこと

が實行されねばならぬ、其事については後に論ずるであらうが、今之を生産者側に關しての問題としてみれば、生産者の意圖と態度とに依つても或程度までは其目的を果すを得、その點からして製品の規格化を實現し得べきを否み難い。

部分品の標準化

製品の部分品の標準化といふことは、製品の種類の減少と同様に製品を標準化する上には甚だ重要なことで、生産が飽適合理的なる基礎の上に經營せられ、生産に無駄の生ずるを避け、煩雜な手数のかゝるを免れしめん爲めには、此事は最も必要なことたるのみならず、製品の使用者の側に於ても、此事の實現せられるに連れて多くの徒勞者を省き得ると同時に、積極的にも利便を得る所の少からざるは、現今既に或程度まで此の標準化の行はれたる製品について見れば、容易に之を知ることが出来る。例へば時計の如き、自動車及自轉車の如き、其實例として數へることが出来るであらう。

四 販賣の標準化

生産の標準化と相並んで行はねばならぬものは製品の販賣上に於ける標準化である。そしてこれは一つには作業の標準化に於て之を見たやうに、販賣に要する道の短縮といふ具體的

販賣道の短縮

表現を見なければならぬ。そしてそれは寄生的なる中間商業を整理するといふことになるのであつて、それ自身單獨の意味に於ては、從來既にかなり廣く問題とせられ、其實行にも手が着けられて居る。然し現状に於ては大多數の製品は、其商品としての取引組織があまり複雑になつてしまつて、其取引に携はる中間商業の階段が多きに過ぎ、從て之に従事する商人も過多なるが爲めに、之に要する費用の加重により商品の価格は高くなつて、しかも生産者は多く利する所なく、消費者は消費負擔の重きに苦み、中間商業亦其内部に於

ける各個の商人についてみれば、必ずしも多くの利得を占むるわけでもないといふやうな有様を呈して居る。これは必竟た、商品の販賣組織の複雑に過るといふ事實から生ずる弊害に外ならざれば、其弊を救ふ道としては、成るべく之を簡單化して、生産上にも消費上にも利便を増す方法を講ずることが須要と考へられる次第である。

五 販賣條件の標準化

販賣そのものを合理化せんとすれば、必ずや販賣の條件を爲すもの、標準化を

行はなければならぬ。そして之は一面に於ては生産者側の問題であると同時に、他面に於ては需要者側の問題たらざるを得ない。即ち需要の標準化と伴つて初めて問題となり得るものである。

需要の標準化

されば生産品に關して其の販賣條件の標準化を行はんためには、先づ需要者の側に於て購入する物品の標準を定めることが必要である。これが決定せらるれば、生産者の側に於ては、たゞ之に適應して生産品の種類品質等を定むればよい。そしてよく之に適應し得る者は榮え之に適應し得ざる者は衰ふる迄のことである。けれども實際に於ては、需要者側に於ける購入品の標準決定といふことは、之を實際に行ふはかなり困難なことになるを忘れてはならぬ。何しろ現時の經濟は自由を原則として行はれるものであり、其自由は消費の自由としても原則上確認されて居るのだから、消費者は、購入する財については、其種類形状品質等については、殆んど完全なる選擇の自由を有して居る。其中に在つて今購入品の標準的決定を爲し、之を以て生産界をも規律せんとするのであるから、事は中々容易でない。然かも其困難を増す事情としては、生産者よりも遙かにより多く消費者は個別的であつて、小消費者が多數に分散して居る事情を考へねばならぬ。

さればこの標準的決定は先づどうしても官公衙などのやうな纏めて多種類の品物を多量に購入する所から着手することにならねばならぬ。そしてそれが追々に社會一般に擴がつて、購買者側に於ける標準化が實現することになるのが、最もよく其目的の達せらるゝ道筋と考へられる。そして一度標準が決定されたる以上は、納入せられる商品に就いては一々厳密な検査を行つて、標準化の勵行を期すべきは勿論のことである。そして又この標準化を行ふ道としては、購入すべき物品の型を定め其種類を減少することが必要であつて、此道による簡單化の行はるゝに依て甫めて販賣條件の標準化は其功を奏し得るものである。

要するに斯くの如くにして官公衙に依つて先づ購買者側に於ける購入品の標準化が實行せらるれば、他の一般消費者も漸次これに倣ふに至るべきは、想像し得らるゝ所である。けれども同時に又考へて置かねばならぬことは、一般消費者に在つては、其用ゆる品物の種類や形状や色彩や品質などに就いては、常に趣味の伴ふを免れ難く、趣味の上から品物の品種の變化を喜ぶといふことも、經濟進歩の一證左に相違ないから、それを一概に統一することは中々容易には行はれ難いといふ點である。此事特に所謂流行品について然るものあるは言を俟たざる所だが、普通の品物についても多少ともに其事あるを見る。けれども事の難易は別問題として兎も角も經濟合理化の爲には販賣條件を整頓し之を標準化することが必要で、其爲めには又一般消費者側に於ける購入品の標準化といふことが必要とせられざるを得ない。

六 生産標準化の條件 生産を標準化することの必要なるは、上に説く通りであるが、さて其標準化がよく實現せん爲めには、更に之が條件を爲すものがある。其條件が満たさるれば行はれ得るけれども、

市場の収容力

其條件は到る所に於て必ず充さるゝものとは限らない。其條件を爲すものとは、市場の収容力これである。生産が標準化され一定の規格に従て行はれることになれば、其生産は當然に大量的生産となつてしまふ。規格化の十分に行はれざる生産と雖も、近時の生産は概して大量的な生産であるが、上に色々述べたやうな意味と目的と方法を以て規格化が爲さるゝに至れば、生産は成るべく品物の型や種類を少くして行くことになるから、其少い型や種類の品物について見れば、同種同型のものが多量に生産さるゝことになり、大量生産の傾向は益々強められることにならざるを得ない。

市場としての農村

所が生産が斯く大量的に行はれ得ん爲めには、其多量の然かも種類や型の少い品物を吸収してよく之を消化し得るだけの市場がなくてはならぬ。苟も現時の生産が所謂市場生産であつて、専ら市場に賣出す目的を以て行はれるものであるからには、之は絮説を待たずして明かなことである。然らば斯かる包容力を有する市場はといふに、それは國內と國外と双方に之を求めなければならぬ。國內の市場として工業生産の爲めに其生産物を吸収し消化して呉れるものは、謂ふ迄もなく農村である。されば農村が或程度の人口を有し、相當に繁榮せる状態に在るといふことは、工業の隆盛を圖る爲めにも必要である。此事は合理化の問題を離れて一般的に國民經濟の構成を攷へる場合にも、常に其必要の感ぜらるゝ所だが、合理化の問題に關聯しても是非考へられねばならぬ所である。從來商工業が発達すれば、農業は之に逆比例して衰微する傾向あり、其狀特に英國の如き近世的商工業國に於て著しきものある所から、商工業と農業とは所詮兩立し難きものゝ如くに考へられ、前者が発達すれば後者は當然に衰へるもので、之を忍ばなければ商工業の隆盛は期し得られ

ないものであるかの如くにも信ぜられて居た。従て商工國主義を採るべきか、農業立國主義を採るべきか、兩者何れか其一を選ばなければならぬものなるかに信ぜられて居たやうな次第である。惟ふに之は或程度迄は避け難い勢で、特に現時の資本制産業組織の下に於ては、農業には其本性上とかく十分によく之に適合し得ない所があつて、資本制の發達は殆んど當然に農業の衰微を來たす實狀の全くこれ無しとはいふことが出來ない。併し之は實は程度の問題である。工業がよく發達し得んことの爲めには是非とも其製品を消化し得るだけの力を備へた市場の存在することを必要とし、其市場が或は植民地などに於て十分に廣く海外に存在するか、然らざれば外市場が自國の製品に向つて門戸を開放して呉れるかでなければ、必ずや相當に廣大なる内國市場を必要とする。そして其内國市場はいふ迄もなく農村を本舞臺とする。されば農村が相當程度に繁榮せる状態に於て存在することは工業發達の爲めに其條件を爲す次第で、工業と農業とは互に相扶け相補ふものたらざるを得ない。

外國市場

外國市場としては植民地其他特殊關係のある市場の必要なるは、言ふ迄もない。特殊關係あるといへば即ち例へば關稅同盟の如きを意味する。普通の外國市場は其國の工業製品に對して市場たると同時に、他の諸外國の製品に對しても市場たる次第で、之に對して自國製品が特別に有利な關係を有つことは出來難い。有利な關係ならずとも少くとも永續的な確實な關係くらゐは有りたいのだが、それも出来るか出来ないか定め難いことである。かゝる特別な關係はたゞ自國の植民地や關稅同盟の間柄に在る所のものゝ市場との間に於てのみ之を有し得べきに過ぎない。そしてかゝる特殊關係ある市場の存すること、然かもそれが十分に若く

は相當に大なる消化力を有する市場として存することは、大量生産を旨とすべき工業のためには甚だ必要なことたらざるを得ない。其關係は内國農村市場の存することの必要なると同様である。

併し植民地其他特殊關係ある市場の存するか否かは、其國の歴史と現狀とに依て分るゝ所で、存する所は結構だが、存せ無き所は致方がない。茲に於てか最後には普通の外國市場の必要といふことが出て來る。そしてそれと自國との間に成るべく親善なる關係の存する否とは、やはり自國商工業の隆盛を圖るを得ると得ざるとに影響する所多大である。そしてそれが大量生産を旨とすべき規格化されたる工業生産のために必要の條件の一を爲すことは、甚だ明かなる所といはねばならぬ。

何れにしても國內外に涉つて、十分なる包容力を有する市場の存することは、生産に規格を與へ之を標準化することの條件を爲す次第で、其條件が備はらざるに於ては、規格化されたる大量生産は常に過剰生産となる恐れあり之に脅かさるゝ所とならざるを得ない。これに脅かされては生産を思ひ切つて伸張し得ざるは言ふ迄もない。斯くては折角の規格化も忽ちに行詰ることゝなるわけなれば、つまり包容力ある市場の存在が生産を標準化し大量生産を行ふことに對して其の條件を爲すといふことになる次第である。

第三章 合理化と企業合同

一 合理化とカーテル 合理化の問題が攷究さるゝに當つては、合理化と企業合同との關係について觀察する所がなくてはならぬ。合理化が生産の組織に關しても實現すべきものである限りは、企業合同のことは問題とならざるを得ないのである。

合同の二種類

企業合同は其行はるゝ有様により便宜上これを區別すれば、二種類ある。一は水平線的結合として出來上がるものであり、他は垂直線的結合として成立つものである。前者は同一種に屬する企業相互間に行はるゝ合同で、後者は異種類の企業間に爲さるゝ合同である。前者の代表的なものとしてはカーテルを掲げ、後者の代表的なものとしてはコンツェルンやトラストを挙げなければならぬ。

カーテルの目的とする所

仍て先づカーテルと合理化運動との關係に就いて見るに、從來獨逸を主なる地盤として發達した所のカーテルは、産業の合理化といふことに關しては、之を促進したりといふよりも之を阻止する所の方が大であつたと謂つて差支ないであらう。なぜなれば、カーテルは同一企業の部類に屬する者が相結合して其共同の力を以て外部に對立し、其存立の基礎を堅めると共に共同の繁榮を圖ることを目的とした。即ち或は生産品の價格を協定して相互企業者間の競争を防ぐと同時に外部の競争者に對抗したり、或は生産品の販路を協定し

或は輸出を共同にすることに依て市場に對する支配權を握ることに腐心するなど、其爲す所は生産者の利益を本位として之を護り又之を増進することを主眼とするものであつた。從てカーテルが堅固な團結として出來上れば、之に屬する企業家相互間の内部の競争が無くなり、然かも生産品の價格の協定を爲す等の場合に於ては、其の團結内の企業家中の最劣等のもの即ち所謂限界企業家の業務がよく立行き得る程度の價格を決定して、それ以上優れたる地位と境遇とに在る企業家は、餘分利得にあつかることの出來る仕組とする方針で進んで來て居る。とにかく獨自一己の力を以てしては、到底その企業上の獨立を維持し得ないやうな劣れる企業家も、カーテルに加盟することに依て其の獨立を維持し相當の利得を擧げ得るに至ることは、カーテルの立場とする所より考へて當然のことであつた。

消費者の被る不利

之が爲にカーテルは、生産企業を爲す者からいへば都合のよいもので、其運営宜しきを得ば、生産界に覇を唱へ市場に對して支配權を振ふに足るほどのものであるけれども、消費者の側からいへば、動もすれば其利益を犠牲にせられる恐がある。少くとも其利害の多く顧慮せられない恐あるを否み難いことは、先にも企業組織の章下に之を示した通りである。例へば輸出カーテルの如きが、國內に於ては生産品の價格を協定して、比較的多くの企業利潤を占め、其力を以て外國市場に對してダンピングを行ふやうな場合には、國內の消費者は其犠牲に供せらるゝこととなる。そして外國市場のダンピングが成功して其所に獨占的な勢力を振ふことが出來るやうになるか、さなくも他の競争者に對して優越の地位を占めるやうになれば、其市場に於ても段々に價格を釣上げて消費者の負擔は増されてしまふことになる。何れにしてもカーテルは企業家

合理化の
目的とす
る所

本位の團結であるから、消費者の側の利害は殆んど念頭に置かれぬ有様となるを避け難い。

カーテルの行く道筋が斯くの如きものであるからには、それが劣等企業家をしてよく其存立の地を得せしむる點から見ても、産業を合理化するといふ理想には合致し難い所がある。合理化を行はんとするからには、其經營の拙劣なる企業家の如きは、却つて益々其地歩を失つて、優秀なる企業を爲すものが之に代り、企業界一般の標準が高められる風でなくてはならぬ。又消費利益の尊重といふことも合理化運動には當然に包含せらるべきものであつて、之を犠牲にして顧みないものは、合理化の傾向を阻止するものといはねばならぬ。

さればカーテルは之を労働者の立場から見ても、労働者が生産者として其生産利益の裾分けに預かる點からいへば、労働者に有利なものと考へられるけれど、労働者の消費者としての立場からいへば、其利益は傷けられこそすれ、増進せられることはない。所が労働者は生産者として生産に従事するとはいへ、生産利益の分配には殆ど與かること無く、たゞ企業家の事業の爲に之に提供せる労働に對して勞賃報酬を得るに過ぎない。さればたとへばカーテル組織の堅固に出來上つた企業に雇はれて居るにした所で、其爲に生産者として利得する所は殆んどなくて、其製品の消費者たる立場に於て利益を傷けられる所の方が常に多いのが實狀でなければならぬ。ましてカーテルは労働の雇傭條件に關して雇主たる企業家の立場を有利にせん爲めに、其目的を以て造られることもあるのだから、かゝる場合には労働者はカーテルのお蔭で搾取をこそ被れ、之に利せられる所はあり得ない。併しかくしては合理化の理想は益々遠ざかるばかりで、其到達せられる見込は無いことになつてしまふ。

彼此考ふれば、合理化といふ問題に對しては、少くとも從來のカーテルは其勢を促成するよりも却つて之を妨礙した所の方が多かつたと見て差支ないのである。そしてそれはカーテル本來の立場と任務とから當然にかくあるべきを考へられる。

最後に今一つカーテルに關聯して考へられる所は保護關稅政策である。カーテルが其働を十分に發揮せんとするには、保護關稅の援助を受けなければならぬ。殊にカーテルが國內に於てカーテル所屬企業の生産せる商品の價格を釣上げたり一定の價位に維持せんとするに當つては、保護關稅が外國からの同種商品に適當なる限度の關稅を賦課することに依て其の輸入を制限し、安價なる外國品の來つて競争を試み、カーテルの價格釣上策を切崩すことの無いやうにする必要がある。若し有力なる外國品の競争が自由に行はれるやうであつては、カーテルは如何に堅固な團結をしてみた所で、到底その價格釣上策に成功し得るものでない。その意味に於て保護關稅はカーテル運動に對しては、實に其條件を爲すものと見て差支ない。

されば今産業の合理化といふ見地からいへば、カーテルが其傾向を助成するよりも却つて之を阻止する嫌ある場合には、保護關稅はやはりカーテルを助けて、劣等企業の維持に成功せしめ、企業の改善により合理化の傾向を進むるよりも之を妨ぐることになるを免れ難いのである。概して保護關稅は幼稚なる産業を保護して其の發達を扶くることを以て目的とするものであるから、其の産業が合理化の主旨に叶つた方針の下に進むものであるならば問題は無いが、寧ろ其の主旨に逆行するやうなものである場合には、保護關稅は合理化に背馳し、カーテルの如きを助けて、却つて産業界の墮落と少數なる有力企業家の横暴を逞うせしむること

保護關稅
政策と合
理化

とらざるを得ない。

垂直線的
合同に依
る合理化
の容易

二 合理化とコンツェルン カールは前に述べたやうに同種企業の間に行はれる水平線的な合同であるが、之に對して、垂直線的な合同として、異種企業にして然かも互に業務上の連絡關係あるもの、間に行はれる合同は、主として互に原料關係を有する多數企業間に實現するものである。其著明なる實例としては、コンツェルン若くはトラストを擧げることが出来る。

此種の垂直線的な合同のカーテルと異なる主要なる點は、先づ第一にはカーテルが對市場的なる合同なるに反して、此種のものには對內的な經營的な合同たる點に存する。即ちコンツェルンの如きは、經營上に於て互に密接な關係を保つて、經營上に生ずる種々の無駄を省き、進んでは經營をして益々有效なる働を爲し得るものたらしめんことを目的とする。されば大抵は互に原料關係に在る異種企業間に行はれ、一企業は其原料として用ゐる所のものをコンツェルン内部に於ける他の企業から買取り、一企業は又其の生産品をば原料品としてコンツェルン内部に於ける他の企業に提供することにするから、其原料と製品とは確實に獲得され、又販賣され、然かも其引渡條件の規格化も都合よく行はれて、結合せる各企業は之を一まとめに見れば、一の大いなる經營體系として出來上り、一定の計畫の下に集權的に其經營の指揮を爲すを得、經營上に於ける合理化は比較的容易に然かも首尾徹底して行はれ得る。

此種の企業合同は、例へば石炭採掘業及び鐵礦業と製鐵業と機械製造業との如きもの、間に於て行はれ得る次第で、掘られた石炭や鐵礦はコンツェルン所屬の製鐵業に對する原料として交付せられ、製鐵業の生産せる鐵條や鐵竿の如きは同じく又コンツェルン内部の機械製造業の原料として使用せられる。そして此等の多數企業以外に更には運輸業の如きも同じコンツェルンに加入するを得るし、製鋼業や電氣事業の如きも亦よく之に加入することが出来る。

コンツェルンはカーテルとは其の立場を異にするものなるが故に、或種の企業がカーテルの勢力から獨立し其の束縛を脱せん爲めにも之を組織するを得る次第で、之を組成することに依て能くカーテルに對抗するに足る力となることが出来る。各個獨立の企業が孤立して居ては、到底カーテルの如き合同せる結合力には對抗し得難いから、之に對抗する爲めには、やはり大いなる結合力として表はれる必要がある。然かも其結合力はカーテルとは異つた立場に於てするに依り益々其の對抗力は強くなり得る筈だから、コンツェルンの如き新合同形式が表はれるやうになつたことは、一面に於てはカーテルの發達と其弊害との著しきを示すものとも見るを得ると同時に、他面に於ては企業の状態を其經營の内部から改善する必要の痛感せられるに至りたるを思はしむるものと謂はねばならぬ。

之を産業合理化の上から見れば、カーテルも其の弊害の方面をのみ見るべきではないから、カーテルとコンツェルンとの双方が並び存するに依りて合理化は都合よく行はれ得るものと謂ふ外はない。即ち兩種合同の適當なる配合運用に依りて産業合理化は其目的を果たし得べきである。たゞ併し乍ら合理化に關してはコンツェルンの方がより多くの貢獻を爲し得べきを否み難いのであつて、それはコンツェルンが經營の立場に於てする內面的結合なることよりして當然に表はれて來る次第である。然かもその合同の勢が合理化の必要

兩種合同
の適合

に促されて大いに行はれるに至つた實狀あるに於て、益々然らざるを得ざる所である。

三 合同の行はれる方法 共同企業の形式としての企業合同に就いては、前に第二編第五章中に之を説いたが、尙ほ茲に合理化の行はれる道筋として合同の必要が考へらるゝからには、更に之に關する觀察を試むることの必要あるを見る。

現今企業合同の行はれるは、主として株式會社についてのことであるが、其合同には人的結合に依るものと、物的結合に依るものがある。就中人的結合に依るものは比較的簡單で、大抵は監査役の交換に依りて爲される。即ち合同せる諸會社が互に其各々に於て行はれる業務の實狀を詳かにし、以て一つには經營上の共同的なる方針を建てんが爲めに、又一つには互に業務を監督して非違なからしめんが爲めに、常任的なる監査役を交換するものこれである。從て合同が唯だ此程度のものに止まる限りは、それは比較的薄い結合たるに過ぎない。そして又此種の人的結合は、やがて生るべき物的結合に達する階段として又は準備として行はれる場合も少くないのである。

之に反して物的結合は比較的複雑であるが、其行はれる主なる方法は全體三種に過ぎない。一は子會社 (Subsidiary company) の設立に依るもの、二は代表會社の設立に依るもので、普通にトラストといふは之である。そして之には Holding company の設立によるものと機關銀行を設立することに依て行はれるものとある。三は同盟會社の設立に依るのである。そして例へば甲會社は乙會社に株券を交付し、乙會社は丙會社に、丙會社は丁會社に、そして乙丙丁會社は甲會社に株券を交付するといふやうな違り方で行くのである。

人的結合
と物的結合

此等の合同の目的とする所は、具體的に見れば種々雑多だが、その内容について分類的に觀察すれば、主觀的には勢力範圍を擴張すること、客觀的には經營の合理化といふこと、に外ならない。そして其の合理化は合同の結果可能となる單一意思に依る事業の支配と單一計畫に依る經營の實行とを以て實現さるべきものとする。從て其の合同が大規模に行はるゝほど、この單一的計畫に依る經營上の支配と實行とは其効果を發揚し得べき筈のものなるは、容易に考へ得らるゝ所である。そして前に述べた體系化が完全に行はるゝほど、合理化も十分に實現し得べきは、言を俟たずして明かである。

機能的結合
と作業上の結合

四 合同の種類 合同の種類について前に説いた所のものは異なる標準に照らして分ち考ふれば、機能的結合のものと作業上の結合のものがある。前者に在つては又生産の機能を有する方面のものと商業の機能のものとが結合するのがあるが、更に又生産業と運輸業との間に結合の爲されるのがある。

先づ生産業と商業との間に行はれる合同は、之を合理化の意味合から見れば、主として中間商業を整理する目的で行はれるものといふことが出来る。つまり生産業者が商業をも兼ね行つて從來獨立なる商業と取引を爲すことに依て其商業々務上に生じたる獨立の利益を、併せて生産上の利益として收めんとする企たるに外ならぬ。從來の實狀に於ては、所謂中間商業は外國貿易方面にも内國商業方面にも共にかなり複雑に出來上つて居て、生産者と消費者との距離は、之が爲めにかかなり遠ざかつたものであつた。試みに外國貿易方面について見るに、中間商業者として數ふべきものは、買集人、大買集人、輸出商、輸入商、輸入港に於ける大商人(問屋)、内地大商人(問屋)、小賣商人といふ有様である。内地商業に於ても大體これに似たもので、生産

中間商業の整理

地に於ける買集人、大買集人、問屋、次に需要地に於ける問屋、仲買人、小賣商人といふ有様である。此等多くの中間商業を整理するといふことは、經濟界を合理化する爲めには、是非必要のことなるは明かである。其全部を整理してしまうことは出来難く、或種の商人の存在は、必要缺くべからざる所なりとするも、適當なる又可能なる範圍に於て之を整理するは、合理化を實現する所以でなければならぬ。然らば之を整理して或種の中間商業の存在を必要ならしむる道はといふに、それには二三の道が考へられる。其一は生産業者の間にカーテルを組織することであつて、生産品の販賣に關する事務を共同のものとしてカーテルの共同機關に依て之を行ふことにすればよい。即ち所謂販賣カーテルを組成する道である。其二は生産者自身が小賣を行ふ道であつて、其爲めに賣擴め人を使用してこれを需要地の目星しい所に派遣することや（獨逸では夙に世界の各地に此種の賣擴め人を派遣して居る）又需要地諸所にエゼントを設置することや、次には又支店を設置することが有用な方法とせられる。そして此等二つの道は生産者が同時に商業を営む道であるが、次に第三の道として考へられる所のは、小賣業者が自ら商品の生産を行ふことである。之は元より大資本を要するから普通の小さな小賣商人では出来難いが、百貨商店其他大規模經營を行ふ小賣業者は或程度までは之を爲し得る。又純粹の意味の小賣業者でなくて消費組合の如きものが自ら取扱品の生産を行ふ場合も、やはり中間商業を省く道としては最も注目し得る所であり、又合理化の爲めには大に推奨せらるべきものなるは勿論のことである。

商業支配の解放

要するに斯くの如くにして生産業が商業から解放せらるゝに至らんことは、合理化を行ふについては必要なことだと考へられるが、たゞに生産業のみならず一般的な意味に於て經濟生活の非商業化 *Entkommerzialisierung des Wirtschaftslebens* といふことも、現今の時勢に於ては其の實現が希望せられる。それはつまり従來あまりに經濟界が商業の爲めに支配せられる所となり、一般を擧げて商業化する風のあつたに因る次第と見なければならぬ。そしてそれは現代のような資本主義經濟の時代に於ては洵に避け難き勢ではあるが、苟も經濟界を合理化せんとする限りは、或程度まで經濟界を商業支配の實狀より救ひ出すことが必要とせられざるを得ない。

非商業化の二意義

然るにこの經濟生活の非商業化といふことには、二つの意味がある。一は非商人化 *Enthandlung* といふことであり、他は非商業化 *Enthandlung* といふことである。其の意味を少しく具體的にいへば、前者は商人の数を少くすることを意味し、後者は全然商人を排除することを意味する。兩者何れを實行するにも、生産及び配給に關する業務組織を大いに改革せなければならぬが、前者に比し後者は一層根本的な改革を要するは言ふ迄もない。

そして又商業を排除するといふことには、全然商業業務を無くしてしまう場合と、商業業務は存続するけれども、たゞ獨立商業を排除する場合とある。後者の場合には、其存続する商業業務は獨立の商人をして行はしめないで、生産者自らこれを行ふこととする外はなく、前者の場合には經濟組織の改革により商業業務の必要なに至らしめることになる。例へば消費組合が大いに發達して需要品の生産も配給も共に一手にこれを組合の手に依つて行ふことになれば、商業業務は全然其の存在の理由も必要もなくなつてしまふ筈である。

商の業務
の兼營

又フュージョンやカーテルの類が完成せられたる状態を考へても、商的業務はやはり存在の必要を失ひ、生産配給共に之をフュージョンやカーテルの手に依て行ふことが出来る。すべて此等の場合には配給に關する事務は商的業務として行はれるのではなくなつてしまふ。併しカーテルの如きは、商的業務は業務として存続する場合にも、生産業者の手に於て之を兼營する爲に、カーテル組織を用ゐる場合少からざるを忘れてはならぬ。

何れにしても、全然商的業務が無くせらるゝ場合と、たゞ獨立の業務として排除せられ兼營的に行はれる場合とでは、經濟組織の上から之を見れば、其間よほど事情の相違あることを知らねばならぬ。そして合理化の事業は、全然商的業務の必要なきまでに至るに依て完成せらるべきことも、容易に想像し得られる所である。

次に生産と運送との業務結合について見れば、これ亦生産業者が併せて運搬業務を經營する意味に於ける結合と、運搬業者が同時に生産業務を經營する意味に於ける結合との二つの區別が考へられる。その實狀は例へば製糖會社が同時に鐵道業を經營するものや（臺灣に其例多し）鐵道會社又は電鐵會社にして生産業務を併せ經營するもの（例へば南滿洲鐵道會社の事業の如し）とについて觀れば、大體これを知ることが出来るであらう。

尙ほ此種の業務的結合については、普通商業と運搬業との兼ね行はれるもの、生産業と銀行との兼營するもの、普通商業と銀行との併せ營まれるもの、此等あらゆるものを同時に兼業とするものがある。

作業的結
合

さて以上に示す所は機能的結合に關するものであるが、次に作業的結合について見れば、先づ農業と工業との結合が考へられ、工業内部に於ては前に説いたやうに同種業務間に於ける水平的なる結合と、異種業務間に於ける垂直的なる結合とが考へられる。又商業間に表はるゝ結合に於ては、用途を一にする諸品の販賣上についての結合と、デパートメント・ストア式の結合とが考へられる。此等の中に在つて、合理化に最も密接な關係あるは、從來の實狀に於ては工業界に於ける結合特に其の垂直線的結合であつた。これについては茲に又繰して説く必要はあるまい。

第四章 國際的合理化運動

生産と交易
の不和調

一 國際的合理化の要望 現時の經濟は自由主義の經濟なるが故に、之を行ふ人々に於て自由の意圖に依て自由に之を行ふ結果、これを全社會的に見れば、其間常に生産と消費との不和調が生じ、又商品の需要と供給との關係に於ても、兎角兩者間の過不及なき適合を見るといふ譯に行かない。之が爲めに一國民經濟内に於ても生産上には多くの無駄と徒勞が生じ乍ら、然かも同時に他方には消費不足の狀況を呈し、一面には過剰生産があり乍ら、同時に他面には必要的なる消費すら行はれ得ないやうな部類の人々を見る。然るに此の不和調の狀態に對して、之を全社會的に調整する働を爲すべき力は何所にも存在しないで、たゞ事情を成行のまゝに放任する有様に在ることは、前に論じた通りである。

此の狀態は、少しく觀察の範圍を廣くして、國民經濟の領域を越へ、全世界を舞臺として觀察しても同一様である。即ち現今やはり國際間にも自由主義的な經濟活動が行はれて、各國は銘々思ひ思ひの生産交易を行つて居る有様なるが故に、其の生産と交易とを全世界的に見れば、其間に常に調子の取れない所があり、從て生産と消費との結合も過不足なく行はれ得る有様には甚しく遠ざかつて居る。其狀況は一國民經濟内部に於けるよりも、更に亂調子で、之を全體として整へる働を爲すものは何所にも存在しない。

之が爲めに或國に於ては或種生産品の過剰に苦んで居るのに、同時に他の國に於ては同種の生産品の供給不足の爲めに苦み、甚しき消費上の缺乏を訴へて、之が苦痛を嘗め盡して居る多くの人々を見るといふやうな有様である。

合理的の
國際的の
要求

然しかゝる狀態は、之を全世界的な見地から見、全人類の福祉の上から考ふれば、如何にも氣の利かぬ話といはねばならぬ。茲に於てか、一國民經濟内に於て經濟一般の合理化を行ふべしとする要求は、引いて國際的にも經濟界の合理化を行はねばならぬとする要求として表はるゝことゝなつた。固よりそれは當然のこととて、合理化はそれが全世界的に經濟全般に涉つて行はるゝに依てのみよく其終局の目的を達し得べきは、殆んど言を俟たざる所である。

労働者階
級に依る
要求

然かも現時の不和調なる經濟狀態の下に於て、常に不便を忍び不利益を負はされて、其犠牲となる者は、經濟界の弱者であらねばならぬ。即ちそれは廣い意味の労働者の階級を以て大部分とする無産者の階級でなければならぬ。そこでこの全世界的なる合理化に對する要求は、先づ労働者の間から最も力強い叫びを擧げることになつた。即ち労働組合は先づ其烽火を揚ぐることに力を致したのであつて、原料の國際的分配に關する要望と（國際労働組合）世界經濟の計画的なる調整を目的とする國際的協力の主張（基督教労働組合國際聯合會）とは、先づ其第一聲として高唱せらるゝに至つた。これは洵に合理化の問題の進展すべき道行としては、當然至極のことゝ謂ふべきであつて、其指導が労働者の團體に依て爲さるゝに至つたことも、容易に理解し得べき所である。

尙ほ合理化の國際的に普及せん爲めには、國際聯盟の力を利用せんとする希望もあるが、其利用は今の處では主として諸國の産業界の實狀に關する統計材料を蒐集することに於てせられるに過ぎない。將來國際聯盟の組織や活動が今少しく發達して來れば、其利用の道も段々に廣くなり、又複雑になるであらうと想像せられるが、それは要するに後日のことに屬する。たゞ興味のあることは、國際聯盟の如きが、單純なる政治的聯合たるに止らないで、勞働問題や社會政策のために盡す所の多大なるに加へて、更に産業合理化の運動にも貢獻するに至らんとする傾向の存するといふことこれである。

二 國際的合理化運動の妨となるもの 然るに翻つて之を觀れば、一方には以上の如く合理化運動を全世界的ならしめんとする希望と努力との存する傍、他方には又これが妨礙となる所の事情の存し、其事情が容易に更め難き實狀無きにあらざることは、見通し難き所に屬する。其妨礙を爲す最も著明なるものは、國家的保護關稅である。

國家的保護關稅は謂ふ迄もなく國家主義に立脚するものであつて、主としては其國の幼稚なる産業の發育を助成せんが爲めに、行はれるものであるが、或は又時には政治上の理由に依り他國の商品を排斥する意味の加はることもあり、又或は名を産業の保護に借りて實は財政收入を得んために高き輸入關稅を課する必要上行はれることもある。其主目的の何れに存するを問はず、保護關稅政策は其國の利益を眼目とし、場合に依ては他國の利益を犠牲にするを顧す、少くとも他國の利益を十分に尊重するものにあらざるが故に、それは動もすれば國家的なるエゴイズムに陥り易い。然かもそれは單純なる經濟政策に止らないで、多少とも之に國家

妨礙を爲す國家的保護關稅

主義的なる政治的見地の加味さるゝを避け難い。

されば斯かる政策の行はれる結果としては、之を經濟上より見れば、國際間に過剩と缺乏との併存する狀況を呈するを免ることが出来ない。即ち之を勞働に就いて見れば、前にも一言したやうに一方には失業といふ痛切なる事情の存するに拘らず、他方には勞働の不足といふこれに矛盾せる事實の存するを見るのである。

それは必竟國際的融通が自由に行はれ得ないからのものであつて、保護關稅政策の行はれる限りは生産手段と呼ばれる所のもの特には原料が偏在することになるを避け難いからである。それに又これを商品市場に就いて見れば、やはり又商品の國際的融通の圓滑に行はれ難きが爲めに、販路の部分的硬塞を生じ易く、一方には商品の不足を告ぐるに拘らず他方には其の缺乏を見るといふ不平均の狀態を呈する。

されば保護關稅の存する限り國際的分業は十分に行はれ難きことゝならざるを得ない。保護關稅政策の立場とする所は、抑も其根柢に於て國際分業の觀念と一致し難きものあり、寧ろ反對に各國毎に自立的なる地歩を造り、出來得べくんば國家的なる自給狀態を出現せんことを以て目標とするものと見て差支ない。これ保護關稅政策の行はれる結果は、これを國際的に經濟の全局に立つて觀れば、各國すべてが夫々自給自足の圓滿なる狀態に達せざる限り、浪費と欠乏との併存することゝなるを免れ難い所以である。

茲に於てか保護關稅主義に對しては、近時かの新自由主義が唱道せられるやうになつた。そしてこの新自由主義的經濟政策はそれ自身獨立の立場に於ても固より其意義が考へられるが、合理化の問題との關聯に於ても其意義が認められる。即ち經濟の合理化を國際的に及ぼして其完成を期せんが爲めには、保護關稅の如

新自由主義經濟政策

き障壁を除去するを要すと同時に、自由主義的なる立場に於て、國際經濟の連絡を圓滿に又密接にし、世界經濟を打て一丸として、常に其全局より利害を考へるを要するものと信ぜられる。然かも又合理化といふ考と自由主義といふ考とは、これを其觀念を爲す所の思想上の立場について見るも、共通の立場の存するものと信ぜられるのである。

第五章 合理化と労働關係

企業家よ
りの獨立
の市場へ
の従屬

労働者の
数の減少

一 合理化と労働市場 合理化の行はれる結果、労働に對して何ういふ影響が及ぶであらうかは、十分立入つた研究をしてみなければ、容易に知り難い所だが、先づ概括的にいへば、合理化が完成すればそれにつれて企業家と労働者との間に存する人倫的な關係は益々稀薄になるべきものであるから、合理化は労働者をして企業家より獨立ならしむるものと見て差支ない。然し合理化が行はれるといふことは、労働者をして労働市場より獨立ならしむるものではなく、やはり労働は市場に於て其の需要供給の適合を見出さなければならぬものである。然らば合理化は労働市場に對して、如何なる影響を及ぼすものであらうか。

先づ労働者が資本に對して有する數の關係の上から見て、其意味に於ける相對關係からいふならば、合理化が行はれる結果は労働者數の減少を齎すものと見なければならぬ。即ち既存産業に於ては労働者に對する需要減少を生じ、若し合理化の結果として産業界に活氣を呈し新企業の勃興を來すことが無いならば、そして又労働者人口の減少といふやうな事情が伴はないならば、其假定の下に於ては労働の供給過剩を生じるであらう。この結果の生ずるのは、主として、前に之を説いた所の器具及機械體系が完成さるゝに因るものたるや、論ずる迄もなくして明かなる所である。

労働者の
内部に對する影響

これは労働者を一般的に見ての話であるが、さて又労働者中に在つては、其内部に於ける階級的區別について見て、合理化の及ぼす影響に如何なる差異があるだらうかといふに、上級に位する人々を要する所比較的多大となるべきを以て、其部類の人々の占むる歩合が従来より増加すべき筈である。これは謂ふ迄もなく合理化に依り産業の組織化が行はれ、その新組織の創造者たり支持者たり、又その新組織に依て行はれる業務の労働關係上に於ける指導者たり監督者たる者を要すること比較的に多くなるべき筈だからである。そして同時に普通労働者については、その智能等に就いて要求せられる一般的標準が高められ乍ら、然かも夫等の人々は普通労働者として多數に需要せられることになる。つまり合理化の行はれる結果は智能のすつと劣つた者は淘汰せられ、普通労働者の一般標準が高くなり、其代り従来やうに労働者中に技能上多くの階級的區別を必要とせざるに至り、中間階級を爲して居たもの、需要が少くなるべきである。其結果従来よりも比較的多数の上級労働者と標準の高められた一般労働者とが用ゐられることになつて、労働者間の階級的區別が少くなり、此關係に於ても單純化が實現すべきものと思はれる。そして従来中間階級を爲して居た手工的熟練を有する部類の人々の必要が漸次減少すべきことは、注意を要する事實といはねばならぬ。

一時的影響と永続的影響

されば合理化の行はれる影響としては、其一時的効果としては失業が増加するを避け難いであらう。併しこれは一時的の效果であつて、決して永続的の效果ではあり得ない。永続的の效果としては労働者の就職口は増加しこそすれ、減少するものとは考へられない。前に詳論したやうに合理化といふことは、或意味に於て廉價化といふことである。即ち合理的經營の下に

大量生産が行はれ、無駄が省かれて能率が上がるから、生産品は安價とならざるを得ない筈である。そして廉價品は大體に於て賣行の多大なるべきは言を俟たざる所で、彼の人造絹絲やフォード製自動車などを見れば其適例を知ることが出来る。然るに賣行の多大なりといふことは業務の隆昌を來し、労働者に對する需要をも大ならしめなければ止まない。加之その隆昌に伴つてその業務の用ゐる原料や半製品に對する需要の増加すべきは當然で、その原料や半製品を生産する産業も從て隆盛に趣くべきである。同時に又隆盛なる産業に在つては機械類を消耗することも多大なれば、之を製造する工業も從て又繁昌すべきである。果して然らば此等すべての産業に於ては労働に對する需要は増加せざるを得ざる筈に思はれる。

たゞ茲にカーテルの如きが跋扈して、其力に依り生産制限が行はれ、生産物の人為的なる供給制限の行はれるやうなことがあると、右の現象の自然的なる發展は阻止せられるから、労働に對する需要も減少したばかりで増加を生じないことになる恐れなしとしない。されば斯かる人為的制限は政策上これを防止する必要あるは、併せ考へて置かなければならない。

不熟練労働者
二 合理化に伴ふ就職状況の變化 上に述ぶる所に照し今一度合理化に依て表はれる就職状況變化の過程を窺へば、作業上に機械を使用すること益々多きを致すに連れて、不熟練労働者は之が爲に追々に驅逐され失業者となる運命を免れ難い。不熟練労働者は大抵動力的な労働か然らざれば極めて器械的な労働に従事するものであるから、機械が段々多く用ゐらるゝに至れば、其爲すべき仕事は機械が代つて之を爲すやうになり、自然その職を奪はるゝことゝなるを免れ難い。

専門的熟練労働者

それと同時に又専門的な熟練を有して居る職工も、機械使用の爲めに職を失ふ恐が多くなる。そしてそれは手工的な熟練を有する職工に於て最も著しく表はれる現象である。之は蓋し機械が発達するに連れて、動力機械以外に仕事機械が多く使用せらるゝに至り、然かも其の仕事機械は益々改良されて、緻密で精巧な働を爲すものとなるから、従来必要で又貴重だつた所の手工的熟練は追々に必要とせられざるやうになり、技術上其存在の理由と價值とを失ふことになるのである。

合理化の問題に關係なく、たゞ單に産業發達の過程の上からのみ見るも、機械の使用が廣く行はるゝに至ると共に、労働者に對して要求せられる所の熟練の意義は漸次變化するものなるを見通し難い。即ち手工的な意味に於ける熟練は漸次廢れて、智的能力の上に於ける熟練が必要となつて来る。されば若し熟練といふ意味は、たゞ技巧的な熟練に限られるものと解するならば、機械の發達に伴ひ熟練は失はれるものと謂ふことが出来る。

従て今これを手工的熟練を有する専門的な職工についていへば、機械使用が盛に行はれ、然かもそれが合理化の爲めに器具及機械體系として完成するやうになれば、それと共に此種の職人は其職を失ふに至るを通れないのである。

半熟練労働者

斯くの如くにして、一方には不熟練労働者が職を失ひ他方には又専門的な熟練職工が失業に陥る勢が馴致せられるのだが、其代りには速成的な半熟練者に對する需要は増加し、見習職工の必要の感ぜらるゝ所多大となる。そして此等の見習職工は速かに之を教育訓練して智的熟練を有する一人前の職工として造り上げね

ばならぬが、其養成は比較的容易に行はれ得る。たゞ重要なことは之が養成の爲めにすべき設備を整ふることであつて、其教育方法に關しては常に科學的研究を必要とする。そして其教育に於ては、作業に關する傳統的な型を打破して之に代ふるに労働科學の研究の成果として表はれたるものを以てすべきである。労働科學の研究に於ては生理的研究と心理的研究との並び行はるゝを要し、之に依て労働者各個の職業に對する適性を研究して、其適性に從つて教育を施し訓練を爲すことにすべきものとする。此種の研究は生産を合理化するに就いては最も重要なことで合理化は斯くの如き基本的な研究の上に築かれなければならぬ。

労働の器械化

三 合理化と労働の單調 合理化が行はれ特に器具及機械體系が完成するやうになれば、作業は段々簡單なものになり、器械的になるは當然である。そして作業が器械的に化するといふことは、之を行ふ労働者其人の働が器械的なものとなることを意味する。特に機械體系の實現として傳送器の使用が廣く行はれるやうになれば、労働は愈以て器械的とならざるを得ず、其勢は大いに促進せられる。即ち労働は其原料を傳送機に依て次から次へ引切りなしに一定の間隙を置いて規則正しく送りつけられる結果、労働者は其傳送機の働に従ひ、その働の速さと同じ速さを以て油断なく、さながら自らも一個の機械である如くに、働かなければならぬからである。

疲労其他の弊害

労働が斯くの如くに器械的なものになるといふことは、労働の倦怠を増し、労働者の神経と身體とを疲労せしむること多大で、其弊害輕視すべからざるものがある。此の弊害に對しては必ずや之を救済すべき對策が講ぜられなければならぬが、その對策は社會政策の方面からと、労働心理の方面からと、兩方面より講究

其對策

せらるべきものとする。先づ社會政策的方面より考へられる對策としては、労働者の代表者をして企業特に勞賃關係の方面に参加せしむること、監督官廳に於て適當の干渉を爲すこと、賃金政策を確立して之に依る統制を爲すこと等が考へられる。就中労働代表を参加せしむることに依つては、機械の運轉速度を緩和するを得べく、作業に要する労働人員を増加するを得べく、更には又傳送機の働きに間に合はないで仕事が残されたものは、之を取集めて別に其れだけに労働を加へる人を置くことが出来る筈である。

労働代表

尙又社會政策的な對策としては、賃金を増加することに依り労働者の素質の向上を圖り、依て以て労働者の仕事に對する適應力を養成することも出来得べき筈のものである。

労働轉換

次に労働心理の方面から考へられる對策としては、先づ考へられる所のは、労働轉換の問題である。労働に於て最も疲労を覺へるのは、單調な仕事を長時間繰返し行ふ場合であるから、適當の時間毎に労働の變換を行ふのは、疲労を防ぐ上には頗る有効のことなるは明かである。たゞ併し乍ら之には自ら又一定の限度のあることであつて、疲労を防ぐだけから見れば變換を行ふのがよいにしても、餘り種類や性質の違つた労働の間には轉換は行はれ難い。それは労働技術の上から見て止むを得ないことであるのに、かなり性質の違つた労働間の轉換でなければ疲労の防止とはなり得ない。従て其間自ら一定の限度あることゝならざるを得ない次第である。

労働者地位の認識

次に疲労防止の爲めに必要なことは、大いなる分業組織の下に於ける労働者各個の地位を知らしむるといふことである。體系化されたる労働組織の下に於ては、労働は頗る綿密なる分業組織となるのだが、労働が分

業的に分るれば分るゝほど、労働者各個人に就いて見れば、たゞ其一小部分の労働に當るばかりで、所謂末技に携はるに過ぎないことになる。従て自己の爲したる労働の結果が、生産全過程の上にとれだけのものとして表はれたか、又自己の爲す労働が生産全過程に對してどれだけ重要な意義を有するかについては、労働者各個は殆んど之を辨へないで、たゞ當がはれた末梢的部分的な仕事をするだけのことになり、従て仕事に對する興味が湧いて來ないで、疲労を感じることも多くなる。此の弊害を防止する爲めには、どうしても労働者各個をして作業全體としての纏つた意義を知らしむると同時に、其作業全體に對して自己の爲す仕事の部分の占むる地位と要度とを知らしむることが必要である。之を知らしむれば労働者は自ら其行ふ仕事に對する興味が湧いて、責任感も生じて、疲労を覺へることも少くならざるを得ない。つまり労働者各自をして集まつて大仕事を爲しつゝ、ありとの自覺心と自尊心とを得せしむるを必要とする次第である。

品性の陶冶

次に必要なるは、労働者品性の一般的陶冶といふことである。之は労働に關する問題に於ては常に必要とせられる所で、その事自身獨立の意味に於て甚だ重要なことであるが、労働の單調より被る労働者の苦痛を軽減する意味に於ても、其心的態度を、確實にして自主的なものたらしむる爲にも、頗る重要な事項たるを失はない。そして其品性の陶冶は、個人として又社會人として兩様の立場から行はるべきものとし、之に關する教育機關の完備を第一の條件とするが、同時に必ずや労働時間を短縮して、労働者に適當なる暇な時間を得せしむることを忘れてはならぬ。此意味に於ても、八時間労働制の如きは是非實行せらるゝを要する。労働者をば恰も機械の如くに取扱つて、之に長時間の労働を課するは、労働の器械的に化して行く勢と相対

つて、愈々労働者をして現代産業の犠牲たらしむることにならざるを得ない。労働者を待遇するに人間らしき道を以てするは最も大切なことである。労働に對するあらゆる政策と施設とは、常に之を以て眼目とせなければならぬ。特に少年労働者に對しては更に多くの暇な時間を與へて、其品性の修養と陶冶とに充つべきものたるは、絮説を俟たずして明かなことである。

氣分轉換

上に掲ぐる所と併せて最後に今一つ必要なるは、労働者に氣分轉換の機會を得せしむることである。その爲には住居状態の改善、田園住居の供給、小公園の設置、小牧畜の奨励、郊外及日曝交通改善、スポーツ奨励といふやうなことが、その條件として考へられる次第で、此等については一々説明するまでもない。條件として此等の施設や設備が供與せらるゝに於てこそ初めて、労働者は、労働に疲れたる身體と精神との元氣を恢復するを得て、常に健全なる身神の状態を保つを得、労働の能率も上がり、合理化は其有終の美をなすを得べきである。

四 合理化と労働政策 上の如く論じれば、吾等は更に進んで労働政策の方面から合理化の問題を致へて見ることに避くべからざるを思ふ。即ち一般論的な見地から、合理化に對する労働政策の必要と其行はるべき道筋とを攷究することの、適當なるを思ふ次第である。

集中的統制

前に之を明かにしたやうに、合理化の爲めに合同の行はれる場合に於ては、其合同が垂直線的合同なる限り、集中されたる企業に於ける労働者に對しては、やはり集中的なる統御が行はれ、然かも其統御は比較的容易に行はれ得ることになる。同時に企業は市場に對しても集中的なる統制を爲し得るに至る。固より其統制

の行はれ得る範圍と程度とは、企業集中の行はれる實狀の如何に依て定まる次第だが、兎に角或程度の集中的統制の行はれ得るに至るは確實である。

對策の必要

今この二つの結果の中第一の結果に對しては、労働者として其利益を擁護すべき必要の生ずるは言ふ迄もない。この利益擁護を全うせんが爲めには、労働者としては經營委員會を組織して、雇主に對して實力と發言權とを有するものとして立つことの必要を、痛感せざるを得ないであらう。此事は合同による企業集中の行はれない場合に於ても、即ち單純企業に於ても固より同様であるが、企業集中が行はるれば、其必要は一層痛切に感ぜらるべきである。

經營委員會

經營委員會の任務とする所は、主なるものが二つある。一は雇主に對して労働者の有する經濟的利益を維持し主張することであり、他は經營の目的を遂行する上に於て雇主企業家を援助することである。第一の任務に於ては、労働者の利害は雇主の利害に對立するものと見て、其の對立關係に於て雇主に對して労働者の利益を増進すべく積極的な主張を爲し、又其の既存の利益の脅されんとする際これを維持すべく擁護の任に出づることを意味する。然るに第二の任務は、労働者が企業そのものに參加することに關する任務であるから、之に依て企業制は其の意義を緩和せられ、多少ともに共同經濟制を實現することになり、從て此の方面の任務は労働委員會の負擔すべき任務としては前者よりも一層困難なるを知るに難くない。併し事の難易は兎に角として、斯かる任務を帯べる労働委員會の設置されたる實例は既に少からず存在する。獨逸に於て見る所によれば、雇主は斯かる労働代表委員會たる性質を有する經濟評議會に、企業及營業の狀態と經營上の

成績と労働需要の豫想とを三ヶ月毎に報告すべきものとなつて居る。大規模なる経営に在つては、経営上の貸借対照表、損益計算書をも提示すべきものとなつて居る。

經營參加
に伴ふ困
難

然し少しく詳かに事情を察すれば、この第二の方面に關する経営評議會の立場は常に甚だ困難なるを見通し難い。現時の營利主義的なる企業經營に於ては、其の企業體の目的とする所の私經濟的なる利益と社會一般より見たる公共的利益とは、常に必ずしも一致するものに非ず、兩者が明かに衝突する場合も決して稀でない。斯かる場合に、労働代表機關としての委員會は、何れの利益をより以上に尊重すべきであるか。企業參加者たる立場からいへば、企業上の私經濟的利益を尊重すべき立場に在ると考へられるけれども、社會公共の利益を犠牲にして、若くは少くとも之を無視して、私經濟的利益を進むるに急なる態度は労働者としては敢て之を爲し得べきであるまい。斯くては労働者は企業家と相圖り相助けて公共利益を壟斷せんとするものなりとの譏を免れ難く、相共に營利主義の弊害を極度に助長するものなりとの非難を甘受せなければならなくなる。

されば労働委員會として取るべき安全な道は、其の任務を第二の任務にまで及ぼさず、第一の任務に限定することである。實際に於ても此限定の行はれる風がある。即ち労働代表委員會は、たゞ雇主に對立せる地位に於ける労働者の利益を維持し増進するために之を代表するを以て任務とするに止めんとするのである。此の限定の下に於ては、労働代表委員會の立場とし任務とする所は、労働組合の立場とし任務とする所に異ならず、從て兩者相扶け相呼應して、其任務を盡すことに専心するを得て、其立場もらくになり、其任務も比較

的容易となつて来る。労働委員會としては第二の任務にまで手を擴げて、企業家と共に迎合して生産利益を壟斷し、生産の價格を釣上げて賃金収入を増し、一般消費者の犠牲に於て私利を圖ると見らるゝことは、最も其立場を困難にするのみならず、労働者は同時に消費者としての利害關係を有する次第なれば、其關係をたどつて實狀について精査すれば、生産者として利する所は消費者として失ふ所となり、結局は、勞して功なきに終る恐なしともしない。

以上論ずる所によつて是を觀れば、合理化の問題は、労働市場、労働組織、其他の諸關係に於て、労働問題との接觸の頗る密接なるものあることが出来る。從て合理化の實現と完成とは、労働方面よりする諸政策や諸施設と相待つて甫めて行はれ得るものなるを否み難く、合理化について研究するに當つては、労働方面に於ける研究の甚だ重要なるを否み難い。

併しとにかく諸方面よりする研究と實行とに依て合理化の完成せられることは、現時の經濟をして大いに整頓せる又更に有效なるものたらしむる所以であつて、經濟一般の進歩を促す道としては、是非とも踏まなければならぬ公道である。之を避くるに由もなく、之を踏むに依て經濟進化の使命は果さるゝものなるを知らなければならぬのである。

經濟學原論（畢）

昭和四年二月十日印刷

現代經濟學全集第三卷

昭和四年二月十五日發行

經濟學原論

著者 河田 嗣 郎

發行者 鈴木 貞
東京市豊町區中六番町三

印刷者 島 潔
東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町一〇八



發行所

株式會社 日本評論社

東京市丸の内昭和ビル

振替東京九六七八

電話九ノ内 (25)

四四四四
三三三三
四三二一

2/20-29





